



SUNTORY HALL

サントリーホールの クリスマス2022

Suntory Hall Christmas Concert 2022



2022.12.25 Sun 13:30

サントリーホール 大ホール

Suntory Hall, Main Hall

主催：サントリーホール 協力：The Okura Tokyo / 六本木ヒルズ展望台

感染症対策へのご協力をお願い

◆館内ではマスクを着用ください。 ◆こまめな手洗い、手指消毒の励行をお願いいたします。 ◆館内でお客様同士の大きな声での会話、演奏に対するブラボーなどの掛け声はお控えください。 ◆咳などをする際には、顔を覆うまたは下を向くなどの「咳エチケット」の励行をお願いいたします。 ◆飲食の際には、会話時のマスク着用をお願いいたします。 ◆周囲の方との距離を空けて、密集を避けるようご協力ください。

Program

コレッリ

Arcangelo Corelli

合奏協奏曲ト短調 作品6-8 「クリスマス・コンチェルト」より 第1楽章、第2楽章

Concerto Grosso in G Minor, Op. 6, No. 8, "Christmas Concerto"

I. Vivace – Grave II. Allegro

シベリウス

Jean Sibelius

交響詩『フィンランディア』作品26

Finlandia, Op. 26

チャイコフスキー

Pyotr Ilyich Tchaikovsky

バレエ組曲『くるみ割り人形』作品71a

The Nutcracker Suite, Op. 71a

- I. Miniature Overture (小序曲)
- II. March (行進曲)
- III. Dance of the Sugar Plum Fairy (金平糖の精の踊り)
- IV. Russian Dance, "Trepak" (ロシアの踊り「トレパーク」)
- V. Arabian Dance (アラビアの踊り)
- VI. Chinese Dance (中国の踊り)
- VII. Dance of the Mirlitons (葎笛の踊り)
- VIII. Waltz of the Flowers (花のワルツ)

—— 休憩 ——

intermission

ムソルグスキー (ラヴェル 編曲)

Modest Petrovich Musorgsky (arr. Maurice Ravel)

組曲『展覧会の絵』

Pictures at an Exhibition Suite

- Promenade (プロムナード)
I. Gnomus (グノーム)
Promenade (プロムナード)
II. The Old Castle (古い城)
Promenade (プロムナード)
III. Tuileries (チュイルリーの庭)
IV. Bydlo (ビドロ)
Promenade (プロムナード)
V. Ballet of the Chicks in their Shells (卵の殻をつけたひなの踊り)
VI. Samuel Goldenberg and Schmuyle (サムエル・ゴールデンベルクとシュムイレ)
VII. The Market Place in Limoges (リモージュの市場)
VIII. Catacombs (カタコンベ)
With the Dead in a Dead Language (死者の言葉による死者との対話)
IX. The Hut on Fowl's Legs (Baba Yaga's Hut)
(バーバヤガーの小屋(めんどりの足の上に立つ小屋))
X. The Great Gate of Kiev (Kyiv) (キエフ(キーウ)の大きな門)

指揮：大友直人

Naoto Otomo, Conductor

ナビゲーター：森川智之

Toshiyuki Morikawa, Navigator

新日本フィルハーモニー交響楽団

New Japan Philharmonic

★本日演奏される曲について、さらに知りたい方はこちらから！
クリスマスコンサートの特集ページに曲目解説を掲載しています。



Profile



大友直人 [指揮]

Naoto Otomo, Conductor

大友直人は桐朋学園在学中に22歳でNHK交響楽団を指揮してデビュー以来、日本の音楽界をリードし続けている我が国を代表する指揮者のひとりである。これまでに日本フィル正指揮者、大阪フィル専属指揮者、東京交響楽団常任指揮者、京都市響常任指揮者、群響音楽監督、琉球響(沖縄)音楽監督を歴任している。1958年東京生まれ。桐朋学園で小澤征爾、森正、秋山和慶、尾高忠明、岡部守弘らに学ぶ。

NHK交響楽団指揮研究員時代にはW. サヴァリッシュ、G. ヴァント、F. ライトナー、H. ブロムシュテット、H. シュタインらに学び、タングルウッドミュージックセンターではL. バーンスタイン、A. プレヴィン、I. マルケヴィチからも指導を受けた。



森川智之 [ナビゲーター]

Toshiyuki Morikawa, Navigator

神奈川県出身。声優・ナレーターとして数多くの作品に携わる。ハリウッド映画ではトム・クルーズ(『ミッション：インポッシブル』シリーズ、イーサン・ハント役ほか)、ユアン・マクレガー(『スター・ウォーズ』シリーズ、オビ=ワン・ケノービ役ほか)、キアヌ・リーヴス(『ジョン・ウィック』シリーズ、ジョン・ウィック役ほか)などの日本語吹き替えを担当。アニメーションでは、『ズートピア』ニック・ワイルド役、『クレヨンしんちゃん』野原ひろし役、『鬼滅の刃』産屋敷輝哉役、『NARUTO—ナルト—疾風伝』波風ミナト役などのほか、数多くの作品に出演。また岩波書店より『声優 声の職人』を出版。株式会社アクセルワン代表取締役。

公式ツイッター：<https://twitter.com/moriax291>

公式ブログ：<https://ameblo.jp/toshiyukimorikawa>



新日本フィルハーモニー交響楽団

New Japan Philharmonic

1972年、小澤征爾、山本直純のもと、自主運営のオーケストラとして創立。97年、すみだトリフォニーホールを本拠地とし、日本初の本格的フランチャイズを導入。定期演奏会や特別演奏会のほか、地域に根ざした演奏活動も精力的に行う。99年、小澤征爾が桂冠名誉指揮者に就任、歴代の指揮者には、初代音楽監督・小泉和裕(75~79年)、第2代音楽監督・井上道義(83~88年)、第3代音楽監督・クリスティアン・アルミンク(2003~13年)、第4代音楽監督・上岡敏之(16~21年)。ダニエル・ハーディングがMusic Partner of NJP(10~16年)、インゴ・メッツマッハーがConductor in Residence(13~15年)を務めた。受賞歴に三菱信託音楽賞奨励賞、三菱UFJ信託音楽賞、ミュージック・ペンクラブ音楽賞など。佐渡裕が23年より第5代音楽監督として決定、それに先立ち、22年よりミュージック・アドヴァイザーに就任している。創立50周年となる22/23シーズンは、様々な記念演奏会を開催、定期演奏会には縁の深い指揮者たちが名を連ねる。
公式ウェブサイト：www.njp.or.jp 公式ツイッター：[@newjapanphil](https://twitter.com/newjapanphil)
公式Facebook：[/newjapanphil](https://www.facebook.com/newjapanphil) 公式Instagram：[/newjapanphil](https://www.instagram.com/newjapanphil)

サントリーホールの クリスマスに寄せて

恩田 陸

よそゆき。おめかし。そんな言葉が半ば死語になってしまった昨今であるが、劇場という場所には、まだもう少しそんな言葉が残っている。そう、劇場では観客もまた、「観られる」立場であり、劇場のロビーや客席という舞台を構成する登場人物の一人なのだ。

長時間座っているのだから、服はいろいろ考える。セットアップかワンピースか。なるべくストレスのないものを。靴もヒールが高いと、考えている以上に足が疲れるので、低めのもの。意外に盲点なのは、アクセサリーのリング選びだ。私は、ごつめでおおぶりのリングが好きなので、普段はよく着けているが、長時間拍手をすると、指にぶつかってしばしば流血していたりするので、長年の学習の結果、コンサートに行く時は拍手しやすい小ぶりのものを選ぶことにした。バッグも、客席で膝に載せてかさばらないもの、かつ膝で横向きに置いた時に中身が落ちないよう、開口部がしっかり閉まるものにする。

劇場に向かうのは、いつもちょっとした緊張感がある。まず、チケットをきちんと持ったか確認する。封筒とかむきだしの状態ではなく、専用のチケットホルダーに入れて、すぐに取り出せる状態にしておきたい。チケットのもぎりの前であちこち探すのはとても焦るし、後続のお客さんにも迷惑だ。ちゃんと開演時間に間に合うよう、逆算して出発時間を決める。ルートと時間は余裕を持って。タクシーが渋滞につかまり、時計とメーターを交互に見ながらハラハラした



挙句、ギリギリに劇場に飛び込む、というのはどうにかして避けたい。開演したばかりのところで、一人客席でゼエゼエいっつ汗だくでいるのは、なかなか厳しいものがあり、「間に合った」「危なかった」というのに気をとられて、最初のほうを見逃してしまったりするからだ。

私の場合、少し早めに劇場に着いたら、客席に着く前に、とにかくにも、まずはホワイトでシャンパンを一杯。日常の時間から、特別な時間に入っていく儀式みたいな感じ。ゆっくりシャンパンの泡と香りを楽しみつつ、コンサートへの期待を高めてから席に着く。

名劇場、名ホールはそこに行くというだけで気分が上がる。このあいだ、大阪のフェスティバルホールに行ったら、皆が入口の赤い絨毯が敷かれた大階段のところで写真を撮っていて、やはり宝塚のある関西では大階段がお約束なのだなあ、と妙なところで感心してしまった。

べらぼうに公演数の多い東京には、良いホールが山とあるが、世界中の音楽家から特に名ホールと名高いのがサントリーホールである。コンサートホールにはシューボックス型(長方形で、いちばん奥に舞台がある)とヴィンヤード(ワインヤード)型(舞台をぐるりと階段状の客席が囲む)の二つがあるが、サントリーホールは典型的なヴィンヤード型で、演奏者との親密な雰囲気が楽しめる。

そんなふうに、ただでさえ特別感のある劇場は、クリスマス・シーズンともなれば、それぞれ飾りつけを競い合い、いっそう華やかな空間になる。

クリスマスというと、いつも子供の頃を思い出す。私はプロテスタント系の

教会が運営する幼稚園に通っていたので、毎年クリスマス劇が上演されていたのだ。賛美歌も歌っていたし、クリスマスといえば歌と音楽、と刷り込まれている。

長じて、大学時代はジャズ・バンドのサークルに所属していたので、コンサートを開く費用を稼ぐため、クリスマス・シーズンはダンス・パーティやクリスマス・パーティで演奏していたので、「ホワイト・クリスマス」や「サンタが街にやってきた」などの定番のクリスマス・ソングが頭に浮かぶ。どちらにせよ、やはりクリスマスは音楽! だ。

素敵なコンサートを楽しんだら、やはりその余韻を反芻したり、分かちあうためにも、ゆっくり食事をしたい。食事での感想戦を済ませたところで、ようやくコンサートが完了する、と言ってもいいくらいだ。かくも、人生を豊かにしてくれるコンサート・ライフ。ぜひ、このクリスマスから、一緒に。

(おんだりく・作家)



クリスマス、 その特別な一日を サントリーホールで。

text by Kishiko Maeda



クラシックのコンサートに行く日。それは目が覚めた瞬間から特別な空気に包まれる一日。

ベッドを出た瞬間からなぜだか背筋がしゃんとし、いつもより少しだけ所作が美しくなる気がする。単純だと笑われてしまうかもしれないけれど、日常の延長線上にある、キラリと輝く非日常こそが今日という日。そう思うと、この単純さだって悪くない。



クローゼットから「コンサートに着て行こう」と考えていた、とっておきの一着を取り出す。

いつもよりも華やかなものでも良いし、ぐっとシックなものでも良い。気負わずリラックスして聴くための、こなれたカジュアルスタイルだって当然悪くない。幼いころ、遠足の日の朝に目を輝かせながら準備をしたように純粋な気持ちで準備すれば、どんな格好も今日を彩る装いにふさわしい。

髪を梳かしたら丁寧なベースメイク。アイメイクにハイライトにルージュ。靴やコートも吟味して、軽やかな足取りとともに「一年を締めくくる最高の一日になる」と心

の中で唱えながら家を出る。

余裕を持って到着するだろうからカラヤン広場でお茶でもしようか。それとも六本木を軽く散歩でも？

サントリーホールでのプログラムは、チャイコフスキーの『くるみ割り人形』にムソルグスキーの『展覧会の絵』など。

サントリーホールとも深い関わりのあるヘルベルト・フォン・カラヤンも十八番のひとつとしたこれらの楽曲は「あまりクラシック音楽に詳しいわけではないけれど」という人——もちろん熱心にクラシック音楽を聴き込んでいる人も——演奏の美しさや愛らしさに酔いしれられるものばかり。

奇しくも『くるみ割り人形』は、とあるクリスマスの日のお話。サブスクリプションで手軽に聴ける、

過去の名演を聴きながら会場に向かうのも良いかもしれない。

「小序曲」を再生して、淡い息を吐き、街を見渡す。なんだか愉しいことが起こりそうな予感に駆け出したくなる。

「行進曲」でメトロの階段を駆け下り、「金平糖の精の踊り」に耳をすませながら過ぎゆく駅を眺める。

「ロシアの踊り(トレパーク)」が始まるころには、どうにも胸が逸って「アラビアの踊り」で少し

だけ深呼吸。お茶目な「中国の踊り」や、誰しもが聞き覚えのある「葦笛の踊り」に微笑んだら、あっという間に夢の世界はフィナーレ。

優美で柔らかな三拍子に身をゆだねる「花のワルツ」。演奏によって感じた情緒をじゅくじゅくと抱きしめ、かけがえのないひと時を想えば、大好きな人に向かって自然と口にしたくなるはず。

「いつもありがとう、メリークリスマス！」



サントリーホールに向かう道のりも、ヴィンヤード(ぶどう畑)形式の客席であるがゆえ美しく私たちにそそがれる音楽の素晴らしさも、幕間にホワイエで喉を潤す1杯も、世界がうんと煌めいて見える終演後の浮遊感も。それらは輝ける思い出として、これから先も記憶に刻まれることでしょう。

クラシックのコンサートに行く日。それは眠りにつく瞬間まで特別な響きが終わらない一日。

前田紀至子 Kishiko Maeda

1985年4月5日生まれ。フェリス女学院大学文学部卒業。新潮社nicola専属モデルや、光文社JJ編集部でのライターを経て、美容やライフスタイルを中心にしたエッセイやコラムを雑誌やウェブサイトへ寄稿。軽やかな視点と文体が幅広い世代から支持を集める。マガジンハウスのHanako.tokyoやモリモトのSUMAUにて好評連載中。ヘルベルト・フォン・カラヤンと同じ誕生日が自慢。

Hanako.tokyoにて執筆中! 前田さんの記事はこちらから➔





出会う。育む。分かちあう。 サントリーの文化活動

1986年、「世界一美しい響き」をコンセプトに誕生したサントリーホール。
国内外から高い評価をいただいていた響きを大切に継承しながら、
すべての人が快適に過ごせるようユニバーサルデザインを推進するなど、
より多くの方々に音楽を楽しんでいただける場となることを目指してきました。
芸術と人との出会いの場をつくり、ともに文化を育み、感動を分かち合いたい。
創業当初から変わらない思いがあるからこそ、時代に合わせて進化していく。
サントリーの文化活動は、これからも新たな挑戦を続けていきます。